

令和8年度第1回北海道立帯広美術館協議会議事録

- 1 日 時 令和8年（2026年）8月21日（金） 14時10分から15時30分
- 2 会 場 北海道立帯広美術館 講堂
- 3 出席委員 加賀学（会長）、石崎庸之、金田一明一、後藤眞美子（オンライン参加）、佐々木宰、笹島香織、佐藤寛之、富永彰子（オンライン参加）、村上達也、持田誠 計10名
- 4 事務局 野上義秀（館長）、西巻信吾（副館長）、瀬戸厚志（学芸課長）、野本寛（主査）、野田佳奈子（主任学芸員）、阿部悠登（主事）、村山美波（学芸員）
- 5 傍聴者 なし

6 議 事

展覧会観覧、館長挨拶、村上委員及び美術館職員紹介後、議事に入る。

- （1）委員意見への対応について
- （2）令和7年度事業の実施状況及び美術館評価について
- （3）令和8年度事業の運営計画について
- （4）協議・意見交換

7 議事録

（1）委員意見への対応について

事務局より、令和7年度第2回会議における各委員からの意見に対し、具体的に取り組んだ事項と意見に対する美術館の考えを報告。

（2）令和7年度事業の実施状況及び美術館評価について

事務局より、令和7年度の事業の実施状況と美術館評価の進捗状況について、前回会議で行った中間評価からの変更点を中心に最終結果を報告。

委 員：資料2の16ページ、美術館評価の課題に書かれている美術館の活用ガイドは、具体的にどのように作成され、いつ頃学校に周知される予定なのか。

事務局：令和7年度のうちに課題として認識し、学校が利用できる取組を1枚ものにまとめ、本年2月に各学校及び市町村教育委員会に周知した。今後は展覧会のポスターやチラシ等を送付する際にも活用ガイドを同封し、オンラインを含めた鑑賞教室等について各学校に認知してもらい、実績を高めていきたいと考えている。

(3) 令和8年度事業の運営計画について

事務局より、予定している令和8年度の事業の運営計画を説明。

委員： 教員研修プログラムについて、どのような形で周知しているのか。また、研修の位置付けはどのようなになっているのか？

事務局： 北海道教育委員会が運用している教員研修のためのサイト「全国教員研修プラットフォーム（Plant）」で周知するほか、文化財・博物館課から全道の学校に通知して周知している。研修の位置付けは、法定研修ではなく任意参加の研修であり、主に小・中学校の教員と特別支援学校の教員が参加している。

会長： 令和8年度の観覧者数の目標値設定について、2025年から2030年の人口減少率5.8%を目標値にそのまま乗じると目標値が小さくなり過ぎるのではないかと？

事務局： 今年度の各展覧会の目標値設定にあたり、4年前から6年前に開催した展覧会の実績を参考にしているため、その実績に対し、同じ期間に相当する5年間の人口減少率5.8%を適用した。

副会長： 教育普及事業の「キッズ・ツアー」の参加者は、学校単位で来ているのか？個人個人なのか？

事務局： 個人を対象に行っている。

委員： 6月に行われた浦幌町の村中教諭によるオンラインアート教室について、主催者側の授業の狙いと、授業を受けた子どもたちの受け止めにどの程度の違いがあるのか、授業の検証・評価は行ったのか？

事務局： 通常、学芸員による作品解説で進めるが、この取組は、村中教諭の連続した授業の1コマとして、村中教諭が作品解説を行ったある意味特別な授業として取り組んだ。このため、学校において授業の振り返りを行っているものと認識している。授業では生徒とのコミュニケーションも円滑で、鑑賞の内容も深まったのではないかと感じている。

委員： 通常は学芸員が行うとのことだが、今後はこうした手法も行って行くのか？

事務局： 今後、学校の先生と連携して同じような授業を実施できるのであれば、1つの方法として視野に入れていきたいと考えている。物理的に美術館へ来ることが難しい遠隔地の学校がある。今回、上浦幌学園が美術館に来れないまでも、のぞき見る形で鑑賞できたことは、非常に嬉しく思っている。

(4) 協議・意見交換

委員： 人口減少が進んでいる中にも関わらず観覧者数が伸びていること、また、委員の意見を真摯に受け止め、毎回取組内容を報告していることについて感謝している。

質問になるが、資料2の4ページと5ページに展覧会毎の有料観覧者数と無料観覧者数の割合が記載されている。無料観覧者の割合は、特別展で年間「36.21%」、常設展で「78.74%」。この数値の妥当性がよく分からないが、常設展の割合が非常に高い

と感じた。今後も高齢化が進み 65 歳以上の無料観覧者の割合が高まっていく傾向が続けば、美術館の経営も大変になってくるのではないかと危惧する。無料観覧者数の割合についての認識と今後の見通しについて伺う。

事務局： 無料観覧者の割合の妥当性については、他館とも比較・分析するなどしてみないとお答えできないので宿題とさせていただきたい。なお、道立美術館の運営費は観覧料収入だけで賄っているわけではないこと、広く道民に収蔵作品を還元していく使命があること、高校生に対する無料観覧の機会を拡大してきていることを考えると、無料観覧者の割合が高まることは悪いことではないと思う。

委員： 8 月 16 日に帯広美術館を訪れたが、展覧会「深緑の森 十勝とバルビゾン」では著名な絵画に親しめるクイズ形式の趣向があり、非常に楽しく学びのある鑑賞となった。受付スタッフはとても好感度が高く、ハロー効果により最高の鑑賞空間にひたることができた。

チームラボ展は共創をテーマとした先進的な企画でありながら、折からの夏休みやお盆時期も重なり、老若男女問わず幅広い世代が活気をもって楽しんでいる姿が印象的だった。チームラボ展のスタッフは統一されたチームウェアを着用しており来館者が気兼ねなく声をかけやすい環境が整えられていた。

一方で、いくつかの改善点も感じられた。第一に、駐車場から館内に至るまでの看板や道標が少なかったり、坂の下から見づらい位置に配備されていて、敷地内を行ったり来たりして、何度も通行人に道を尋ねる場面があったので、初めて訪れる来館者等に配慮した親切な誘導表示への見直しをしていただきたい。

第二に、展示室内の監視員の役割に関する来館者側の誤解と改善になるが、多くの鑑賞者は、作品の近くに立つ、またはコーナーの椅子に座っているスタッフを、学芸員や美術の有識者だと勘違いし、作品について質問をしてしまいがちだが、実際には安全管理を主とする監視員であるため、知識の差に落胆するケースがある。作品周囲の景観を保持しつつも、鑑賞者に一目で理解できる監視員の役割の表記の工夫が必要であると思う。鑑賞者の質問にしっかり回答できるスタッフの配備、もしくは問い合わせ先の案内表示の設置等の工夫が必要だと思う。

事務局： 駐車場から美術館への道案内については、公園管理者である帯広市と相談し、何ができるか検討する。

また、監視員については、作品の保護が基本的な役割であるが、作品の基本的な事項については事前にレクチャーしており、専門的な事柄については学芸員を呼んで説明する体制としている。監視員がどこまで答えられるのかが一般の来館者には分かりづらい部分もあるため、「専門的な説明は学芸員が説明します」という表示等を含め適切な対応を検討する。

委員： コレクション・ギャラリーで監視業務をしていると、子どもだけが展示室に入り、親が入口で待っている親子が多い。本来、親子で美術館に来て一緒に楽しむ姿が望ましいのではないと思う。子どもが喜んで美術館を楽しむことと、保護者も一緒に展示を楽しめることの両方を考え、今後どうあるべきか検討してほしい。

また、喫茶コーナーに中庭を見渡せるガラス張りの部分があるが汚れている。喫茶コーナーのボランティアに伺ったところ、自分たちでは対応できないと聞いた。美術館で作品を見て、よい気分になった後に休む場所でもあるため、清掃等について検討してほしい。

さらに、将来の施設整備について、薄く、ガラスやパネル、曲面にも対応できるペロブスカイト太陽電池（次世代の太陽電池）などを活用し、発電による電気代の回収という経済的なメリットも含めて検討してはどうか。

委員： 帯広美術館は緑ヶ丘公園の中にある貴重な文化施設であり、子どもから高齢者までの身近な存在であってほしい。十勝では高校卒業後に札幌圏や本州へ進学する若者が多く、戻ってくる人が少ない現状がある。一般企業では人を募集してもなかなか集まらなくなっている。そうした観点から、美術館には文化の発信基地としてあってほしいと思っており、望郷の念を育てるような展示を開催してほしい。また、若い世代はテレビや新聞よりSNSから情報を得る人が多い。SNSにより十勝の自然をアピールして、十勝に帰ってきたい、たまに帰省した時には寄ってみたい、と思えるような情報発信を充実させてほしい。

委員： 前回の意見がきちんと検討され、対応されていることに感銘を受けた。人口減少率を実際の人口に基づいて目標値に反映することは非常に現実的であり、今後、規模やマンパワーが小さくならざるを得ない状況の中では、実態に応じた目標設定が必要であると思う。

釧路芸術館と釧路市立美術館の委員にも就任しているが、帯広美術館の入館者数は非常に多く、他の道立美術館と比較しても頑張っており、地域の人々に愛されている美術館だと感じている。その魅力が何なのかは定かではないが、駐車場から歩いてくる気持ちのいい道など様々な要素があると思うが、地域の人々に愛されている状況を大切にしてほしい。

先程、無料観覧者数の割合の話が出たが、公立の博物館・美術館は、収集・保存・研究を行い、住民がアクセスしやすいようにすることが基本的な役割であると思う。公立であっても予算は必要だし、経営的に成り立つのかは分からないが、現実として観覧料を徴収しているが、基本的な立ち位置としては、公設美術館がお宝を保存し、研究し、展示するという役目を持っているので、そこに対する住民アクセスのハードルは基本的には下げる方向が望ましいと思う。また、美術館の根幹はコレクションなので、コレクションをどのように展示し、いかに多くの住民にアクセスしてもらうかが大切であり、コレクション展やコレクションの活用をさらに進めてほしい。

副会長： チームラボ展では、子どもたちが展示室でどのように過ごしているのかと気になっていた。子どもに体験をさせることがメインとなっており、美術館で開催する内容としては珍しいと思った。チームラボ展で集客を目指しつつも、コレクション・ギャラリーでは、落ち着いた雰囲気の中でクイズにチャレンジした子どもたちが受付でスタンプをもらっていた。子どもたちだけであっても展示に来てくれるような引きつけ方も大事だと感じた。

次の「さくらももこ展」については、割引券を握りしめている生徒も見かけ、若い世代に人気があり、教職員の中にも楽しみにしている者がいる。集客的な展示もありつつ、今年度は6本の特別展があるが、メリハリのある展示が大切だと思っている。「さくらももこ展」のような目玉の展示もありつつ、本来のというか古典的な展示を盛り込むことで、人の流れも変わってくるのではないかと。最近は様々な展示を行っていると思うが、とにかく、継続し続けるしかないのではないかと。そうした中で、子どもを引き寄せるような企画も続けて行くことも必要なことだと思っている。子どもが企画した展示会もあってもいいのではないかと。

委員： 毎回、実績と計画の説明を受けているが、多彩な特別展などに感心している。夏休み期間とも重なり多くの子どもたちが来ていると思うが、今後も様々な展示を通じて美術・芸術に触れる機会を提供してほしい。また、人口減少が進んでいる中で、令和7年度の観覧者数は8万人を越えた。年間を通じてこれだけ人が訪れる施設はなかなか無いので、この状況を大切にしていきたいと思う。

委員： 初めて参加し、大変活発で熱心な協議会であると感じた。学校との連携について、美術館がオンラインを含めて様々な工夫をしていることを実感し、学校側でも応えたいと思う。

オンライン鑑賞はいわゆる導入に当たる部分で、本物を見るというのが美術館の一番の魅力だと思う。中学生の時期は、様々なものに触れて自分なりの見方や考え方を形成する大事な時期であり、美術館で本物に出会うことは美術の学習にとどまらず、世界には様々な見方や考え方があることを知り、自分の世界を広げる機会になるので、この地域にある美術館というのは大切な存在だと思う。

学校への取組の広報についてだが、校長は次年度の教育課程や教育プログラムをもう今の時期ぐらいから考え始める。学校と美術館、お互いに2月にならないとスケジュールを組めないところがあるが、プレ周知をしてもらえると学校側も取組に乗って行きやすいと感じる。

委員： 今、村上委員からもお話があったが、今年開催された北海道博物館協会でも、授業のカリキュラムの中にどのように組み込んでもらうかについて話し合った。学校の先生からの助言では、学校も年間カリキュラムがある程度定まっているので、そこに組み入れることは難しいが、翌年度のカリキュラムの事を考えると、前年度の9月あたりに話があるとカリキュラムに当てはめやすいと伺った。

また、教育普及事業の実績は上がっていて、非常に活発に取り組まれていると感じたが、収蔵庫やコレクションの実態があまり見えてこないと感じた。保存・修復については、現在の評価制度では定性評価となっているが、実際にどれくらい修復が必要な作品があり、どのような形で計画的に修復していくのか。また、それが実施できる状況にあるのかが見えてこないのと、可能な範囲で数値化して示してほしい。コレクションの活用についても、どれくらいの作品がまだ公開されていないのかなど、数値化できるものがあれば少しずつでも示してほしい。

また、昨今問題になっているのは収蔵庫の狭隘化。愛知県美術館では共同収蔵

庫の整備が進められているが、道内でも遅かれ早かれ同じ問題が生じるのだろうと思う。道立美術館単館ではなく、帯広美術館の場合は、道東の美術作品の収蔵と情報拠点となっているので、今後、中小の民間等で整理を余儀なくされた作品の受入先の候補となることも考えられるので、地域の作品のデータ集約や将来的な収蔵庫整備について、長期的な視点で計画的に取り組んでほしい。

会長： 美術館の評価項目の中でも入館者数が増えていることは非常に素晴らしいと感じている。委員意見への対応についても、厳しい予算の中で創意工夫しながら対応していると思う。

学校では、ICTの活用が当たり前になってきており、AIの活用を今後どうするのかという話や、現在、国で検討されている次の中学校の学習指導要領では「情報」という教科の導入が話し合われているなど、教育の世界も情報化が進展している。チームラボ展もそうだったが、子どもたちが本物に触れる、体験する機会は非常に大切だと思うし、今後、情報化が進んで行く中で、芸術・美術に触れる機会はより重要になると思う。美術館の果たす役割はますます大きくなると思うので引き続き取り組みの充実を図ってほしい。